

乳児の日本語音声の知覚発達過程

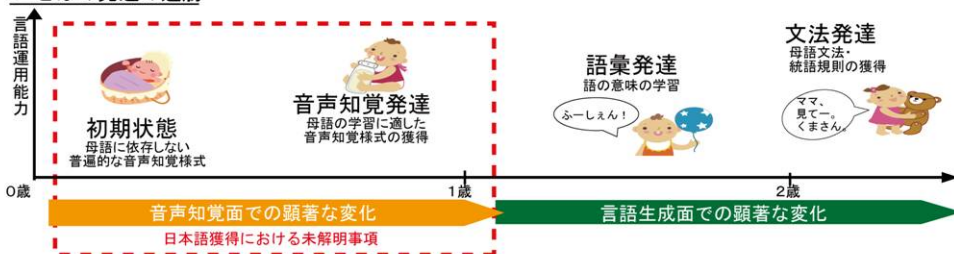
背景・課題：ことばの獲得の第一歩は、赤ちゃんが自分を取り巻くことばの音声の特徴を分析し、その特徴に合わせて知覚様式を変化させることに始まります。しかし、日本語に対するこのような知覚様式の適応化が、いつ、どのようにして起こるのかはまだわかっていません。

アプローチ：日本語に特有の音声構造には、促音・長母音・アクセントといったものがあります。これらの音声構造を日本人の赤ちゃんがどのように知覚しているのか、また月齢によって知覚の精度がどのように変化するのかを行動実験によって客観的に捉えることで、日本語に固有の知覚変化過程を検証しました。

到達点：対象とした各音声構造について知覚様式に変化が起こる時期を同定しました。さらに、こうした知覚変化過程において、これまで実証されていなかった新しい知覚発達モデル（促音＝後天的形成型・長母音＝再形成型）を見出しました。

研究の背景：
日本語獲得す最初期に起こる音声知覚様式の変容は、これまで実証的に検討されていなかった

ことばの発達の道筋

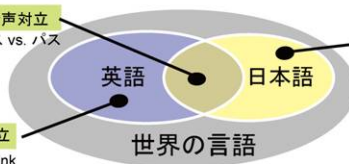


アプローチ：
アクセント、促音、長母音を題材に、日本語に特有の音声知覚発達過程を検討

言語特有の音声構造

英語と日本語に共通の音声対立
e.g. bass vs. pass ≒ パス vs. パス

英語に特有の音声対立
e.g. rink vs. link

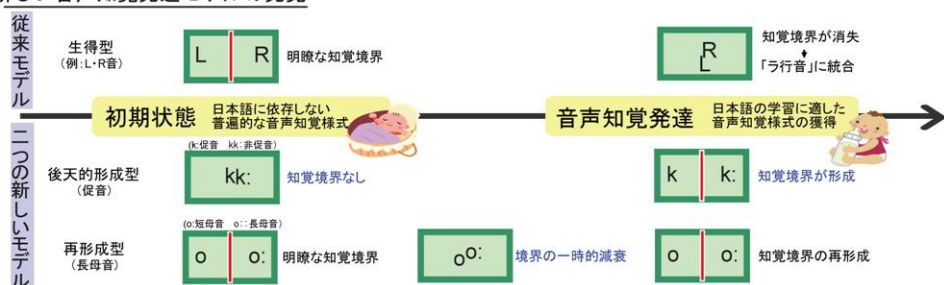


日本語に特有の音声対立
→日本語固有の発達過程が存在

- ・アクセント e.g. とき(時) vs. とき(朱鷺)
- ・促音 e.g. とき(時) vs. とつき(突起)
- ・長母音 e.g. とき(朱鷺) vs. とーき(冬季)

到達点：
日本語獲得における音声知覚様式の変化を詳細に捉え、新たな知覚発達モデルの存在を実証

新しい音声知覚発達モデルの発見



関連文献

1. Mugitani, R., Kobayashi, T., & Amano, S. (2006). Perception and lexical acquisition of Japanese pitch accent in infants. BUCLD31, [Abstract], 65, Boston, USA.
2. Mugitani, R., Pons, F., Fais, L., Dietrich, C., Werker, J., and Amano, S. (2009). Perception of vowel length by Japanese- and English-learning infants. Developmental Psychology, 45(1), 236-247.
3. 麦谷綾子, 乳児期の母語音声・音韻知覚の発達過程, ベビーサイエンス, vol.8, 38-49.

連絡先

麦谷 綾子 (Ryoko Mugitani) 小林 哲生 (Tessei Kobayashi)

協創情報研究部 言語知能研究グループ

